

くつかえしたくないもの

大 広 佳 二

十月二十三日号週間朝日によつて全国的にセンセーションを起した教科書問題とは、先日(の全教協東海ブロックセミナー)準備会に於てテーマに選ばれた、(社会科学教科書問題、昭和廿一年一月廿一日、廿二日、於愛学大)

私は問題の日本民主党刊のパンフレットを読み、歴史研究を志す又社会科学教師を志す学生の一人として動揺せずにはいられなかつた。ふいとの權威と内容に合ふものかどうかは疑問だが問題提起の形で、うれうべき教

科書問題について一特に歴史に關して私の所感をのべ、先輩諸兄姉の御批判を受けたいと思う。

戦前の歴史教育が明かに誤つていたことは誰しもが認めてゐる。その誤りの根本的なものは天皇制の名のもとに一つの型にはめこんだ歴史教育を施行してしたことつまり神代を前提としてしまふ我國の歴史が日本は神國である、世界の一等國である、と子供にやきつけ、しかもそれは絶対的なもので變りなきものとされてゐた。中國、台灣は日本の屬領とみてゐたのである。裏付けのない一連の思想体系も他の思想の介在を許さぬ言論統制によつて立派に成立し、新興宗教の如く子供に熱狂的に受けとらせてゐたのではなかつたか。他民族の隷屬による日本民族の進出、このような歴史思想から生み出される愛國心は独善的な利己的な、いわば前世紀的なものであつて決して眞の愛國心とはいえないのである。それでは新しい歴史とは何だらうか。

私は一言でいえばそれはヒューマニズムが貫かれた世界觀から生まれる有機的なものだと思う。つまり新しい歴史觀というのはある資料定まつたものより生れてきて、その結果は途中にたずさわつた人それそれの主觀によつてうんと異つてきてもよいのではなからうか。それは河出新書の歴史を学ぶものの爲に、中でも、石母田正

氏、林基氏の両者の史觀に於て既に異つて來てゐることからも明かである。しかし歴史の有機性、弾力性もこゝと小中学校の教科書とくると問題はなさか厄介であるように思える。ここで教科書について考へてみる。現場に於て社会の時間に教科書はどのような役目をはたしてゐるだらうか。現在、教科書に従つて遂語的に語句を追ひ教科書の文を追求してゐる教師はまず存在するまい。私は社会科の教科書は、小學校の低学年から、單元学習で進んで行くさつかけを作るもの、問題提起―と思つてゐるがどうだらうか。この意味では教科書内容が完全無缺なることは要求されない（勿論完全なれば尚良いが）、むしろ色々の説をのせて参考の資とする方が望ましいと考へる。

ここでパンフレットをみてみるとある教科書について「中國中心の古代史だ。日本の國を軽く視てゐる。こゝういふ書き方の歴史では子供の愛國心は養成出來ない。つまり中國、ソ連を礼賛し日本を卑すむ偏向教育だ」としてゐる。もつとも教科書の表現のまずい所は目につく。しかし魏志倭人伝等の中國の史書による資料はほぼ正確と見られてゐるし、又それ以外に當時の確つかりした資料はないのである。戦前は松下見林若の、異稱日本伝（江戸、元禄元年）は無視させていた。がこの外國の文

献から日本を觀ているこの本は戦後東大史学会等で大きな問題となつてとりあへられ、現在の教科書にも影響しているものである。ごく一部分から判断するのは危険だかともかく民主党へ当時の一の關係者は教壇に立つたことのない人であらうし、參考意見を述べる學者も又そういう人であらう。教科書の歴史に関する記述が心配する程の偏向となるであらうか。

日本中心の歴史は又變な愛國心を呼び起す旧教育に戻るのではあるまいか。歴史はくり返すとかいうが戦前の旧教育はもうくり返したくはない。が逆コースの動きは中央に於て認められる。それこそ、うれうべきものでないか。私達は學問的な立場から又教育者の卵たる立場からのもつとこの社会科と教科書問題について考えねばなるまい。